

医芸歌壇



夕映えのなか

青森 秋 霧 朝 光

吹ぐ風に池の噴水かたむきて淡き虹たつ夕映えのなか

湯あがりの火照りを冷ます橋のうえ小春日和のせせらぎの音
噛みあわぬ会の流れに暮えてじく心あまして冷め茶を飲む
いくたびも滑り落ちまた雪山に挑みて登る羚羊の子は
一面に馬鎗薺の花咲きかろこ変わらずつゝ夏のはじまり

早 春 東京 小 松 安 彦
幼稚園の庭に八つの雪だるままだ残りゐる節分の夜
二分咲きの紅梅の枝のあはひより火星輝く立春の宵
金星と再び会ひて春分の夕暮にするもの思ひ
横顔に血惚れてをればスケルベヌアルマストイドウス

熱帯魚のやつなる種と深海魚の如き我どが歌舞伎座にある

早 春

神奈川 武 井 忠 夫

しだれ梅のふぶぬの晝朝な朝の温お口差しに紅を増す

陽も柔み水温のりし顔に集つ池の金魚の動き日々増す

水温の日増して出で夜籠もへ春なる浅き量の躊躇

躊躇の跡巡り来て水温の這い出で柔らかな體を浴びる龜

萌え出でる季に先がけ道の端の「わ」の花の咲き溢れたる

熱海旅行

千葉 蒲 谷 玲 子

真国繰りは聴つたが

東京 田 村 豊 幸

貴一お姫の話をすれば娘はたゞに「尾崎紅葉」「あほな話ね」と
四月より大学生となる娘の「ザート」は特注ヘグレードアップ
ボーネルンドの初音もじはひどい繕ひどくと思つたが口のいと
空と海さり立つ名所錦が浦の塵にせり出す美しひつ松
大学生となる娘は髪を梳めめマーキュリヤーすあなた幸せになりて下さい

「を見れば万歳それつきり帰らぬ友に「ああそつ」の声
龍の玉まことにこの妹はスイカですよと持つてきました
なにゆゑにしき人はかりの夢を見るきのいも今朝も別の人なり
梅の鉢田の群がドツと来てゆらゆらさせサシと消えたり
ベランダで枯りした盆栽今年また「あんと海水をやねず」

茨城空港

茨城 羽生 藤 伍

筆談

東京 横田 英夫

茨城の空港、階のレストランへ売店にておもむろに通る
茨城の空港開港し記念なり露ヶ浦にて七色帆船

早春の風は湖上にやゝ強く七隻の船何れも満帆
七隻の船は夫々七色の大帆を張り湖上に並ぶ
虹鳥の湖上に舞ふ波風にこぼれし虚渺としてある如し

補聴器の会話われてははじかして同期の念も遠退きており
寒き夜の水交茶の「錦まつ」同期集いで酒酌みだわす
筆談のメモ書き回る友の話で心温むぬ如月の夜
俳諧「鶴」波郷と飲みしこじもをメモし記して友は微笑んで
語もまた「フランシア」等新あとの思つ玉記つ語はぬあら

特別支那降校医五年を迎へ 東京 林 林 区

初めての校務めし運動会太鼓のひびきはつかしきかな
小西胸に抱へし大太鼓打つ音轟き湧く運動会
泣く童べ涎を垂らす童べ在り校医の心國しつつ診つ
校医と二十六年の勤め終へ校舎を眺め別れを惜しむ
十一代校長先生の御近影一人一人を想ひ出るも

桜 東京 初芝 澄 雄

トンネルを出でし所に駅前あり千本桜の指針に沿ひぬ

小松川千本桜花満ね生に座せる人々多し

花桃の美しく咲く町緑の都の西北耳大通り

神田川岸を埋める花の列園口辺り人影繁し

神田川水面を眺め驚きぬ花びら浮きて群れ流れ行く



カット 村山 正則